

ルポルター
叢書—8

満州事変に
限らず日清
日露戦争
戦争のたびたび
筑豊は不況から脱却した。
石炭はいわば重工業の基盤で
戦争産業の中心であった。不況に
あえいた三年前が變のよに、採炭制限は
事実上撤廃されて……本文より

晩聲社

筑豊 炭夫塚

ちくほう

くづか

林えいだい

落警事故「一生をなかに」にあられた以上、会社には
企業の責任がはかばかしくあつてゐる。死にぞこないの恥さらしに……
生きながらえてみて、体をなやまして、心をなやまして、
恨みを晴らして、心をなやまして、心をなやまして、
……



林えいたい

運命の神様が、生かすか殺すかを心算した
 巧の一生を操縦する運命の神様がある。
 若や云い、死なねばならぬ、と云ふなら、
 生かすか殺すか、と云ふなら、と云ふなら、
 運命の神様が、生かすか殺すかを心算した

著者■はやし・えいだい■

1933年（昭和8年）福岡県筑豊生まれ。

早大中退 ルポライター

主な著書

『これが公害だ』写真集 自費出版

『八幡の公害』朝日新聞社

『望郷—鉱毒は消えず—』亜紀書房

「Pollution by the Ashio Copper Mines」

-Text and photography-ストックホルム世

界環境会議報告書

『嗚咽する海—PCB人体実験』亜紀書房

『絶望の門から—加藤新一翁の生涯』晩聲社

筑豊坑夫塚

ルポルタージュ叢書 8

1978年3月15日 初版第1刷

著 者 林えいだい

装 幀 杉浦康平+鈴木一誌

発行者 和多田 進

発行所 株式会社 晩 聲 社

〒101 東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル

電話 (03) 255-4014

振替・東京 6-50696

印 刷 株式会社 祥文堂印刷所

製 本 ナショナル製本

*定価はカバーに表示してあります。乱丁落丁はお取り替えいたします。

筑豊坑夫塚・目次

はしがき.....6

地底の呻き.....13

貝島炭礦 14

東三坑爆発 20

朝鮮人坑夫 24

強制労働 31

運命の日 44

筑豊へ.....51

故郷をあとに 52

炭鉱流転 56

義兄との出会い 72

生まれ変わった青年 77

一家心中未遂 84

結婚 89

転勤 98

賭博事件 109

橋口を殺せ 116

裏切り 121

死の床で 122

苦悩 128

再手術 136

生活の不安 146

「依願退職」という名の解雇 155

失われた栄光 169

狂った日々 170

炭鉱犠牲者 182

つらい日 190

息子たち 197

ホームヘルパー 206

消えた貝島炭礦.....	219
--------------	-----

大之浦炭礦の閉山	220
----------	-----

送金	224
----	-----

弱者切り捨て	230
--------	-----

貝島炭礦の終末	236
---------	-----

あとがき.....	242
-----------	-----

付録.....	245
---------	-----

負傷箇所見取図／災害事変報告	
----------------	--

筑豊坑夫塚

はしがき

昭和四八年一月二十八日。筑豊最後の坑内掘である貝島大之浦炭礦が閉山になった。

貝島労組の屋根に、雨ざらしになり、ちぎれた赤旗が風に揺れていた。貝島銀座といわれた大通りには、炭塵が舞い上がり、薄汚れた野良犬がゆったりと走り抜けた。アーケード式のマーケットには、十数軒の小さい店が並んでいるが、開いているのは三つの店だけで、開店休業の状態だった。入り口の果物屋の店先には、買い手のない黒く変色したバナナが放り出されている。塀の竹竿には土のついたままの大根がぶら下がっているが、それも売れ残ったものであろうか。

なにもかもすっかりくたびれた様子で、貝島炭礦の現状を象徴していた。

「こんにちは……」

私は、マーケットの一番手前にある駄菓子屋の中へ遠慮がちに足を踏み入れた。七〇歳前後の小柄なおばあさんが、背を丸めて炬燵でテレビの画面に見入っていた。

「閉山になって、いよいよさびしくなりましたね」と私は話しかけた。

「ええ、もうごらんのとおりで、商売はさっぱりですたい。炬燵に入っただけであんまり表に出ることもありません」

と力なく答えた。なるほど、炭住を歩いた感じでは店に買い物にくるような客はいないようだ。

「やっぱりだめですか？」

「もう、商売をやめようかと思うとります」といって、下駄を突っかけて店先へ下りてきた。間口は一間、奥行きが一間半ほどの店で、奥のテレビのあるところだけが少し高く、畳が一枚敷いてあった。

閉山二カ月前から貝島炭礦へやってきていた私は、町で会う人の中に身体障害者が非常に多いことが気になっていた。足の悪い人、片手のない人、指のない人……、その人たちの顔には閉山になったかどうかという不安が色濃くにじんでいた。

「いよいよ閉山になりますばって、落磐事故におうて、長い間、闘病生活をしている方を知らんですか？」最後までいい終わらないうちに、おばあさんは涙ぐんだ顔を上げた。

「私の主人もその一人です。そしてすぐその下の炭住にも、三池闘争に貝島労組からオルグに行つて、ケガをしてずっと寝たきりの人もおりますと」

「えっ、ほんとですか？」

私はおばあさんの顔をじつと見た。彼女の名前は桂フサエといった。

「私の主人は、もうこととして三〇年間、寝たきりです。三六歳の冬に貝島炭礦の坑内で落磐事故に会いましたと。それっきり『下半身不随』で寝込んで、いまはもう六六歳ですたい」

三〇年間寝たきりとは、気が遠くなるような年月ではないか。

「ずーっと私が介抱したばって、もう疲れはててしもうた。落磐で脊髄をやられたもんで、もうきょ

う死ぬ、明日死ぬ、といわれて三〇年ですたい。三〇年は長いですばい。あなたの年はなんぼか知らんばって、あなたの生きてきた間、寝とりますもんね。主人は貝島炭礦の職員でした。あのままケガせんで勤めとりゃ、私がこんな駄菓子屋せんでもよかとに。きつと不幸な星のもとに生まれてこらしやうたのでしょうたい。もう、私は諦めとりますと。いまさら、悔んでもしょうがなか」

私は思いがけないおばあさんの言葉に生唾を飲み込んだ。人生七〇年として、人生の約半分を病床にあるとは――。

「足から下の神経が完全に麻痺して、あお向けに寝たままですと。大便も小便もいつ出たか自分ではわかりません。それでオシメをすけとりますと」

「ご主人に会わせていただけませんか？」私はせっかちに頼み込んだ。

「さあ、会いましょうかね」

「せめてご挨拶だけでも……」

私はすがりつくようにいった。「なかなか気むずかしいですからね」といいながらも店を出て、家が見えるところまで私を案内してくれた。

普通の長屋式の炭住と違って、職員住宅は一段高い丘の上にあった。

「ここは職員住宅で、玄関入ってすぐ左の座敷に寝とりますと。まあ、行くだけ行ってみなっせ」と教えてくれた。その職員住宅は店から五〇メートルほど離れたところにあった。

大通りから職員住宅に通じる小さい道を右に折れると、「桂巧かつたぐ」という表札がかかっていた。二軒続きになっているが、門構えは立派である。玄関横の物干竿には五、六枚の白地のオシメが風に揺れ

て音を立てていた。

「ごめんください」

奥のほうから「はい」という返事があった。「どうぞ、庭のほうへお回りください」と、今度ははっきりした声が返ってきた。庭には盆栽や植木鉢がびっしり並んでいた。

少し開いたガラス戸の隙間から取手の先が出て「よいしょ」という声とともに、がらがらと音を立ててガラス戸が開くと、部屋の中が丸見えになった。桂巧さんは部屋の中央の藁蒲団の上に、頭を外に向けて横たわっていた。右手を差し出して、テーブルの上の鏡を取った。その鏡で私を映しながら話をしだした。顔と腹、それと両腕は腫れ上がったように丸々と太って、普通の人の二倍以上もあるようだった。枕元の手の届く位置に、電話器からテレビのスイッチ、ポットまで揃えてある。

私は、突然の訪問を詫びて、事故のときの話をお聞きたいと切り出した。最初は拒否されると思っていたところ「こんな見苦しい姿をさらして恐縮です。どうか汚いところですが上がってください」といった。三〇年間、闘病生活をしているとは思えないほど、明るい表情で話し出した。

「奥さんと店でお会いしてきました。桂さん、あなたも大変でしょうが、それ以上に奥さんの長い間のご苦勞は大変だったでしょうね」といった瞬間「女房には迷惑ばかりかけています。なに一つ幸せにしてやれんで……」と絶句した。長い間の闘病生活で、耳のうしろがすり切れ、化膿止めのガーゼに血がにじんでいる。そこへ涙が流れ落ちた。

左手で小さい紙挟みを取り上げると、右手で硯箱の筆を握ってたっぷり墨をしたらせ、溢れる涙もそのままに、

「閉山はわが身に悲し……」とまで書いたところであとが続かず、枕元のタオルを取って涙を拭った。ある日、突然、襲いかかった落磐事故は、桂巧さんの人生を根底から変えてしまった。それから三〇年間半人間として、くる日もくる日も死と対決しながら暮らす人生は、なによりも耐え難いものに違いなかった。

「私の勤めていた第三坑で、閉山前に二人の老練な先山さきやまが落磐事故で死にましてね。かわいそうなことをしました。私もいつそのこと即死しとったほうがよかったですよ。労災法のできる前の事故は、法の適用を受けんとですよ。こんな差別がありまっしょいか。死んどれば遺族年金もあるし、年取った女房は路頭に迷わんですんだとです。生きながらえて、二重の苦しみを受けんならんとは、因果なものです」といった。

私は炭鉱事故だから、当然、貝島炭礦が一生の面倒を見ているものだと思っていた。

「退職願を出しましたからね。いまは治療費だけは貝島炭礦から出してもらっています。こうして職員社宅に住まわせてもらっていますからありがたいですよ」

「ありがたい」という言葉に私はひかかった。たとえ職員社宅に住み、治療費だけが無料であったとしても、一生を台なしにされた会社に対して、なぜありがたいと思うのか、私には理解できないことであった。

「貝島炭礦に対してどう思いますか？」私は無遠慮に聞いてみた。すると、むっとした表情になり、「私は他の炭鉱に行った経験もあるが、貝島炭礦の悪口をいわれると腹が立ちますね。私はこうして不具者になっとなりますが、もしもですよ、再起したとしても他の炭鉱には決して行こうとは思いまっ

せん。貝島炭礦だったら喜んで入社します。私のような無学な者でも、これまで引き上げてくれたと感謝しとります」

そして、昔を懐しむようにこう続けた。「ここから私たち三人が選ばれて、社長が伊勢神宮へ参拝させてくれたとです」

南九州から両親に連れられて流民の里、筑豊にきて、落磐事故で倒れた一坑夫。下半身不随の体を病床に横たえながら生き続ける桂巧さんの、その生涯を私は記録したいと思った。

それから約四年、病床を訪れては、神経の激痛が襲う間をぬって聞き書きをしてきた。この記録は、桂巧さんの長い人生のほんの一部分に過ぎないが、筑豊の炭鉱に生き抜いた名もなき一坑夫の墓碑として残したいと思う。

かつて日本の花形産業の一つとして繁栄をきわめた筑豊の石炭は、うたかたのように姿を消して、スクラップ化した巨大な廃墟は雑草でおおわれ、炭鉱犠牲者の慰霊碑だけが昔の面影をとどめている。約一世紀にわたって筑豊の地下資源を喰い散らし、たっぶり甘い汁を吸い尽くした炭鉱資本は、エネルギー革命を契機にいち早く筑豊から逃げ出した。

残された筑豊の自然は完全に破壊され、投げ出された数十万人の坑夫とその家族は、流民としてさまよい続けている。

一度破壊された自然は絶対にもとに戻ることはない。また、冷酷無残に棄民された炭鉱犠牲者たちは、いまなお炭住の谷間で呻き苦しみながら死を待っているのである。

筑豊に残された傷跡はあまりにも大きく、その後遺症は永久に消えないであらう。

産業という名の恐るべき企業と国家の犯罪性を、私たちは肝に銘じて頭の中に叩き込んでおかねばならない。人間にとって企業とはなにか、国家とはなにか、こんなにちほど鋭く問われていることはないであらう。

筑豊はすでに過去のものとして忘れられようとしているが、決して過去のものではないのである。筑豊が新しい装いをこらして変わろうとしても、石炭産業資本による収奪の残虐性とその歴史は永久に消えることはない。

ボタ山の曠野に狂うこがらしの響きの中に、傷つき倒れた数多くの坑夫たちの悲愴なおたけびが聞こえてくるような気がする。

地底の呻き



東三坑ガス爆発殉職者の慰霊碑

■貝島炭礦■

麻生・松本(安川)・貝島は、筑豊の御三家と呼ばれ、長い間石炭界に君臨してきた。一介の坑夫から身を起こし、今日までの貝島炭礦を築き上げた貝島太助社長は、苦難を乗り越えて、一代で石炭王といわれるほど事業家として成功しただけに、ある面では徹底した精神主義者でもあった。その伝統は代々受け継がれていった。

貝島太市社長は、昭和十一年、下関市長府町の本邸に日の本神社を建て、明治天皇を祭神として祀った。彼にはいくぶん神がかり的なところがあって、貝島炭礦の従業員に対しては、敬神崇祖、感恩報謝、産業報国を求めて、忠臣愛国思想を教育しようとした。

日中戦争がはじまったあとの昭和十三年三月には、国家総動員法が成立した。翌一四年六月、鉱業報国会が結成され、産業報国の名のもとに筑豊の炭鉱全体が戦時体制一色に塗りつぶされていった。貝島炭礦ではこれにならって「産業報国に就き我社従業員の心得べき三項目」を決めて従業員に示した。

第一、炭礦の主とするところは出炭にあり故に百事出炭を以て基準とすべし。

第二、協同一致は出炭の目的を達成する為極めて重要なり、而して其の何係たるを論ぜず、上下をとわず各々其の職責を重んじ、一億責務の遂行に努むるは、即協同一致の趣旨に合するものとす。

第三、出炭能率向上の要訣は、有形無形上に於ける各種の能力を綜合して奮励努力するにあり。